

オープンミーティング

日時 2022年9月24日の15:00~16:30

内容 「ICPIC 2020 in Tokyo でのシンポジウム『P4C で変わる日本の教師』を振り返って」第2弾

発表者 城野知佐 大阪府松原市公立小学校教諭
森本和夫 大阪府枚方市公立小学校教諭

参加者 一般参加者4名、運営委員4名、合計8名

城野

P4C で変わる日本の教師

自分を表現することを大切に作る教室

自分の授業展開がP4C 的だと気がついた

意識的にしようとしてきた。

子どもの学びの捉え方が変わった

図工に出会って自分が一変した。すごく苦手だった。

そこに居ることだけで表現になる。

自分が自分でいいと思った

先生が表現を狭い意味で捉えていたのではないか。

分っていても感動する。当たり前ではない。

一緒に驚けるのが大切

知っていることに驚けるというのがいいな

走ってみて、疲れたということが分った

実感を伴って発見したことを

P4C 的な身体が無ければ、このようなことはなかった。

普段の取組みが生きているのではないか。

1年生の初めから、謎に思った事は何でもいいから書いて入れてもらう。

朝の会で、毎日それを取り上げて話していく

質問ブックを使って一問一問応えていく。自分たちで問いを作れるようになった。

クラスづくりのために何ができるか

子どものために、哲学、哲学対話という言葉を使うことはない。

森本

教師になったのは、あるいみ「でも」「しか」教師が可能だったから。

特にどういう教師になりたいというイメージはなかった。

20年ほど前に教師になり、大学院で哲学を専攻したので、小学校の教科としては「道徳」が近いと思って、大学院でのゼミ形式で、テーマ（問い）を決めて皆で話し合う授業をした。

しかし、「道徳」を専門にしている先生からは「そんなのは授業じゃない」と徹底的に批判された。「道徳」の授業には決まったやり方があるということで、そこからの批判。

それで、「道徳」からはしばらく距離を置いた。

2011年頃になって、また哲学的な取組みをしたいという気持ちが出てきたが、一方でいわゆる「道徳」の授業はしたくない、ということで、阪大での「こども哲学 p4c」の講座に参加。

そこから p4c をし始めた。

11年前から8年前までは p4c は全くうまくいかなかった。

当初は問いを私が出した。円座を作り、ドッジボールを使っていたが、本当にボール投げで危険な状況になった。円座を作ること自体が困難になってきた。

p4c の授業そのものがうまくいかなかったが、それを子どものせいにはしていた。

「なぜうまくいかなかったのか？」と自問、分析した。

私が出した問いが哲学的で難しい。そのような問いを無理やり押し付けていた。

私が議論の方向を一方向的に導こうとしていた。子どもはそのようなことを望んでいない。

私対話に本気で参加していない。上から目線で授業を構成していた。自分が授業を楽しんでいない。

このような状況の時に金澤先生から、「p4c は知らない先生も〈p4c マインド〉を持って学級経営をしている人はたくさんいるよ。」というコメントを貰った。最初は p4c マインドとは何を意味しているのか分からなかったが、この言葉が心に刺さって、その後よく考えてみた。自分の P4C では、形は円となっはいたが、自分の都合のいい意見ばかり拾い、自分にとって都合のいいクラスにしようとしていたのが分かった。つまり、子どもの意見を本当の意味で聴いてはいなかったということが分かった。このことを p4c マインドという言葉で気づかされた。つまり、自分に問題があったんだと。

その後の改善

- ・問いは子どもたちから出してもらおう。
- ・意見が出なくても、しばらく待つ。
- ・聞くことに徹する。
- ・議論を導くことをしない。
- ・まとめて結論を出すようなことを止める。

- ・成績をつけるような、良い悪いというような評価を止める。

その効果〈7年前から現在まで〉

- ・問いは子どもたちが選んでいるので、子どもたちは積極的に発言するようになった。
- ・子どもが教師を見て話すということがかなり無くなった。
- ・p4cの授業が楽しいと言ってくれるようになった。
- ・私自身がp4cを楽しめるようになった。

その副効果1

- ・他の授業ではあまり発言しない子が、p4cでは沢山話をするようになった。
- ・いわゆるかしこい子も自分の知識をひけらかすと批判されるようになった。(フラット化する子どもたち)
- ・他の授業でもp4c的な対話の時間を増やしたところ、授業に積極性が出てきた。
- ・男女含めて、クラス全体が仲良くなった。
- ・私自身、ようやく教師の仕事が楽しくなってきた。

副効果2

- ・板書もしなくなり、しゃべることもなくなり、授業にエネルギーを使わず、体が楽になった。
- ・たまに授業を見学する先生が、いつも座っている森本を見て、不思議そうな顔をする。
- ・p4cに関心を持ってくれる先生が全体の20%くらいになった。
- ・授業観、子ども観がだいぶ変わった。
- ・「教えなければいけない」から「子ども同士が関われば、自分で学んでいく」
- ・自然体で授業ができるようになった。
- ・あまり怒らなくなった。
- ・「怖い先生」から「面白い先生」に変わった。

まとめ

- ・p4cは「手法」ではなく、「学級経営・子ども理解」の考え方、思いが大事。
- ・「やらなければ」ではなく「やって楽しい」と思えるから続けられる。
- ・「p4cは絶対ではない」という視点が大事。絶対と思ったら、旧来の教科や道徳授業の専門家になってしまう。
- ・p4cマインドを持つことが一番大切。

Q&A

Q：子どもが教師に向かって話すということは、授業の中では多い。というのも、答えがあるような場合だと、子どもは教師にこれが答じゃないのを探って、教師に向かって言うから。これは本当の意味で話し合いなのかなという疑問を持つ。教師が評価を入れなければ、子どもが子どもに向かって話すようになるというように言われたが、子どもが子どもに向かって話すということであれば、本当の意味での話し合いが行われていると思うので、

どのようにしたらこのことが可能になるか、もう少しお聞きしたい。

A：教師が望む答えはもちろんある。その場合、私は最初にそれを子どもに示してしまう。例えば、この問いには正解があると子どもに伝える。しかし、P4C の場合は、これから考えてもらうことには、正解はない、先生も知らない。同意と納得が必要となる。先生もその話し合いに参加するのであって、評価する人間ではない、とはっきり伝える。先生も答えを知らないし、自分の意見を言います。この議論の中で納得していけるようなものを作り上げていかない、ということをはっきり示すようにしている。そうすると、子どもたちは、これは、自分たちで作りに上げていく話し合いなんだ、先生の顔をうかがう必要がないんだ、ということが分って、子どもは自分の自由な意見を出してくる。

Q：先ほどのコメントで、問いのデザインの紹介の所で、推論の仕掛けのある問いということ言われたが、一方で、子どもに問いを決めさせるということ、話しやすい問いとそうでない問いがあるような気がして、その辺が矛盾するというか、つまり、子どもに問いを作らせるということはわかるが、その一方で、推論の仕掛けのある問いとなると、矛盾するのかなと感じる。

A：P4C in schools KANSAI -JAPAN のウェブサイト <https://kansai.p4c-japan.com/> ⇒about⇒問いの4つの部屋 <https://kansai.p4c-japan.com/about-jp/comm-tool/> が参考になると思います。子どもたちが出した問いを、分類してくれますかと尋ねて、例えば、問いには4つの部屋あるようなんだけど、どれに当たると思う、と訊いて分類してもらう。そのうえで、みんなはどういう問いがいいと思いますか、と訊いて、問いを決め議論し、議論の後に振り返りで、どうだったと訊いていく。このようなことを繰り返していく。そうすると子どもたちは、例えば、答えが分っている問いは面白くないということが分ってきて、そうでない問いを選ぶようになってくる。あるいは、この問いは調べればどうしてわかるんだろうか、あるいは、この問いはどうしてよくないんだろうか、と訊いていく。問われた問いを直接問うのではなくて、問いがどういう性格を持っているかというメタレベルの問いを子どもたちに共に考えてもらう。このようなことを繰り返していくうちに、先ほどの推論の仕掛けのある問いを子どもが考えていくようになる。

A：議論の過程で問いが変化していくことがある。これで話していたらうまくいかへんな、という感じで、問いが変わってくる。今は新しいクラスだったので、先ず、問いを出すということをした来た。その中には盛り上がる問いもあったが、何回もしているうちに、その問いは直ぐに答えられるやん、と発言する子が出てくる。次第に、みんなでお話し合う問いを出せる子が育ってくる。

Q：この問いに答えなさいと教えるのではなく、問いで対話を経験させていき、子どもに考えさせていく、あるいは先生と一緒に考えていくということをするということですか。

A：そうですね。そうしていくうちに、質問するのがうまくなる子が出てくる。すると、授業が自然と進んでいく。

Q：自分の過去を振り返って、それを否定するという事は教師にとっては難しい。それ

を森本さんができているのが素晴らしい。かつては怖い教師だったが、今は面白い教師になっている。怖い教師というのは、怖がっている教師だと思う。自分が怖いから、頭ごなしに言ったり、こういう風にしなさいとか、そういう問いはダメだから、こういう問いに資なさいとか、問いは自分が選ばなければ対話はうまくいかないとか、言ったりしてしまうのではないか。そこを怖がらなくなるための、こつとか、どうして怖がらなくなったのかということをもう少し教えてもらえたら。

A：難しい質問ですね。怖い教師は、怖いと思われている。確かにそういう役割をしている先生もいる。ただ、子どもの話していることが面白いなと思って、それを一つ一つ拾っていく。つまらない話が面白くなった時、ほーっと反応する。つまらないと思える話に対し、そんなつまらない話はするなというのではなく、そんな考え方もあるんだなーと思えるようになった。面白いと思える視野が広がった。子どもの立場・状況を尊重できるように変わってきた。自分の見方は正しいのだという考えは持たなくなった。

Q：そのようになったのは、P4Cのじかんがあったからそうなったのか、あるいはP4Cの時間がある方が、そうなりやすかったのか。

A：P4Cに自分がかかわったからだと思う。子どもを見る軸が変わる。所謂成績のいい子がいいわけではない。P4Cをすることで、評価の軸が増えた。

文責 梶形